幼児の攻撃行動と向社会的行動のモデリングにおよぼす母子関係の影響

和歌山大学 森 下 正 康¹

The influence of perceived mother model attitudes on children's aggressive or prosocial behavior

Masayasu Morishita (*Department of Psychology, Faculty of Education, Wakayama University, Sakaedani, Wakayama 640*)

The present experiment was to examine the influence of perceived attitudes of mother models on preschool children's aggressive or prosocial behavior. Based on the score of CCP (children's cognition of parents) Test, sixty four-year-olds were selected and then modeling sessions were administered to them. Their mothers and kindergarten teachers were asked to answer a questionnaire on aggression and altruism of children in daily life situations. Mothers were also required to make self-ratings on their aggression, altruism and rearing attitudes. The following results were obtained. Boys who perceived being rejected by their mothers displayed less imitative aggressive behaviors than other boys and they showed significantly more extrapunitive responses in the P-F Study. No relationships were found between children's modeling behaviors and their aggression or altruism. Children's aggression at kindergarten correlated positively with their aggression at home and with their mother's aggression. It was noteworthy that girl's altruism at kindergarten correlated positively with their mother's rejection, control, and aggression.

Key words: modeling, aggressive behavior, prosocial behavior, mother-child relations, rearing attitudes.

攻撃行動や向社会的行動 (prosocial behavior) の発達は社会化に関する領域の中心課題であり、文化的社会的文脈のなかでの人間関係の影響を強く受ける。人間関係のなかで、特に親子関係が子どもにおよぼす影響は大きい。ここではどのような親子関係のなかで、子どもの攻撃行動や向社会的行動が発達するかに焦点をしばって検討する。子どもの攻撃行動や向社会的行動は親子関係のなかで、意図的なしつけや教育、子どもに対する態度・行動、相互交渉過程、モデリング (Bandura, 1977) の影響を通して発達すると考えられる。

向社会的行動を育てる上で重要なことは、ふだんそのような教育をしているかどうかということよりも、むしろその教育がどのような親によって、どのような仕方で行なわれているかということではないかと考えられる。

Hoffman (1963, 1970) は、罰や脅しを用いて向社会的行動をとらせようとする力中心の態度と、その状況が何を要求しているかを気づかせようとする誘導的説明的態度とを比較し、後者は子どもに対して共感や向社会的

行動の内面化を促進するが、前者は恐怖や怒りを引き起こして向社会的行動を育てないと考えている。確かに、誘導的説明的態度と子どもの向社会的行動との間に正の相関がみられることが多い (Dlugokinski & Firestone, 1974; Hoffman, 1975)。また子どもに対する暖かくて受容的な親の態度が、子どもの向社会的行動を育てるということを多くの研究が示唆している (Londerville & Main, 1981; 森下, 1982, 1983; Rutherford & Mussen, 1968; Zahn-Waxler, Radke-Yarrow, & King, 1979)。

それに対して、母親の罰が厳しいほど子どもの攻撃性は強く (Sears, Maccoby, & Levin, 1957; Hoffman, 1960)、統制的な態度は子どもの反抗的、攻撃的反応を引き出すようである (末田・庄司・森下, 1985)。しかし、罰の厳しさや力中心の態度と攻撃性の関連には研究によって性差や階層差がみられ、結果は一義的ではない (Hoffman & Saltzstein, 1967; 高島, 1970)。

子どもに対する受容的な態度・行動や罰の厳しい態度・行動は、それ自身が子どもにとってモデル行動となっている。どのような親子関係のなかで、子どものモデリング行動が生じるのか。松田 (1973) は幼児において受容的な母親をモデルにしたほうが、拒否的な母親や未知の女性をモデルにするよりも、攻撃行動のモデリングが多く生じるという結果を得た。友人関係における同様

¹ この研究は雑賀千枝 (旧姓中富：和歌山大学教育学部 32 期生) との共同研究によるものである。実験にご協力くださいました和歌山市 M 幼稚園の先生方、お母さま方、園児の皆さんに深く感謝いたします。

な結果は藤井 (1973) にもみられる。他方、子どもに対して受容的、養護的な親とモデルのほうが、非親和モデルよりも向社会的行動のモデリング効果が大であるという結果を多くの研究は示している (Hoffman & Saltzstein, 1967; Yarrow & Scott, 1972)。このような結果は、攻撃行動あるいは向社会的行動を問わず、受容的な親とモデルのほうが一般的にモデリングが生じやすいということを示している。

現実には日常生活において子どもが観察する親のモデル行動は多様である。ひとりのモデルが攻撃行動と向社会的行動の両方のモデル行動を示した場合、子どもにどのようなモデリングが生じるか。この点について、幼稚園児を対象としてモデルを担任教師として実験した結果、教師から拒否されていると認知している男児は攻撃行動のモデリングが多く、その反対に教師から受容されていると認知している女児は向社会的行動のモデリングが多く生じた (森下, 1985)。この男児の攻撃行動のモデリングは、子どものふだんの攻撃性 (aggression) よりも、教師の態度をどのように認知しているかという要因の方と関連が深かった。この結果は、性別の要因や子どもとモデルとの関係を媒介にしながら、モデリングが選択的に生じるということを示している。

本研究においては、攻撃行動と向社会的行動に関して、どのような母子関係のなかで、どのようなモデリングが子どもに生じるかを明らかにしたい。また攻撃行動や向社会的行動のモデリングには、母子関係の要因以外に、子ども自身のふだんの攻撃性や愛他性 (altruism)、母親の側の攻撃性や愛他性の程度が関連していると考えられる。したがって、このような要因が攻撃行動や向社会的行動のモデリングに対してどのような関連があるかについても検討してみたい。

方 法

(1) 実験計画 3×2 の2要因計画。第1の要因は母親(モデル)を受容的と認知している受容群と、拒否的と認知している拒否群、それにモデル行動を見せない統制群の3条件からなる。第2の要因は男子と女子の性の要因である。

(2) 被験者 和歌山市内の M 幼稚園の4歳児 165 名(年齢幅 4:06—5:05)。そのなかから、CCP (林・一谷・小嶋, 1973) の得点に基づいて、条件ごとに男女各 10 名ずつ、計 60 名を選出して、モデリング実験の対象とした。モデルは受容群と拒否群に当たる子どもの母親 40 名であった。また子どもについての攻撃性と愛他性等の評定は、子どもの母親と、担任教師 5 名に依頼した。

(3) 手続き まず、すべての被験児に対して CCP の一部を実施した。次に、被験児の母親に対して、自分の子どもの攻撃性と愛他性について評定を求め、さらに

母親自身の養育態度や攻撃性、愛他性についても自己評定を求めた。また幼稚園の担任教師に対しては園での子どもの攻撃性と愛他性について評定を求めた。次に受容群と拒否群に当たる被験児を、ひとりずつモデリングセッションに参加させた。このセッション終了後に、隠し絵テストと P-F スタディの一部を実施した。1回目の CCP 実施の 50—60 日後、40 名について CCP の再検査を行ったところ、信頼性係数 (0.84) は高かった。

(4) 親の態度に関する認知の測定 後浜 (1978) にしたがって、CCP のなかから救助と親和の各 4 場面、計 8 項目を実施した。ハ切り画用紙大にコピーした図版 8 枚を、被験児個別に 1 枚ずつ呈示して口頭で質問し、口頭で答えてもらい、手引にしたがって評定した。得点が高いほど母親が受容的であると子どもが認知していることを示している。その結果、得点分布は Fig. 1 のようになった(男児: 平均=4.5, $SD=2.25$; 女児: 平均=5.0, $SD=1.91$)。そこで、男女別に、7 点以上の者 10 名と 3 点以下の者 10 名をランダムに選んで、それぞれ受容群と拒否群とした。しかし、母親がモデルとして協力してくれるという条件が必要なために、実際には男児の拒否群に関して、得点 4 の者を 2 名含むことになった。統制群は男女それぞれ 7 点以上の 5 名と、3 点以下の 5 名を合わせて 10 名で構成した。

(5) モデリング実験 (a) モデル行動 モデル行動の内容は、森下 (1985) に準じて、Table 1 のようにブタのぬいぐるみに対する 5 種類の攻撃行動と、人形に対する 5 種類の向社会的行動からなり、すべて言語を伴っていた。受容群と拒否群に当たる子どもの母親に幼稚園に来てもらい、幼稚園の一室(約 15 平方メートル)で、攻撃行動と向社会的行動を含んだ行動を 2 回ずつ演技をしてもらい、VTR に録画した。モデル行動が不自然な流れにならないように、また順序効果が相殺されるように演技順序を 2 通り作り、ランダムに割り当てた。録画時間は 1 人あたり 1 分 15—3 分 25 秒で、平均 2 分 16 秒であった。録画が終了後 “今日、録画をした件につ

Fig. 1. Distributions of scores.

Table 1
Contents and objects of modeling behavior

内容	対象	ことばと行動
攻撃行動	豚のぬいぐるみ	1. “こら、トン、いじわるばかりして” ブタを手でたたく
		2. “ばかやろう” ハンマーで叩く
		3. “あっちへ行っちゃえ” 積木をぶつける
		4. “撃っちゃうぞ、バーンバーン” ピストルで撃つまねをする
		5. “やっつけちゃえ” ブタを足でける
向社会的行動	人形	1. “よい子のエルちゃん、だっこしてあげる” 人形をだっこする
		2. “いい子ね” 頭をなでる
		3. “アメをあげるよ、食べてごらん” アメをなめさせる
		4. “あら、けがをしているのね” バンドエイドを顔にはる
		5. “さあ、ドライブに連れて行ってあげるよ” 人形を車に乗せて引っ張る

いては子どもに話さないように” という主旨の願いをした。

(b) 用意した玩具 モデル行動のなかで使用されるものとしてブタのぬいぐるみ・人形 A・ハンマー・積木・ピストル・アメ・バンドエイド・車の 8 種類、それ以外のものとして人形 B・ボボ人形（等身大のビニール製で叩いても起き上がる人形）・怪獣・ロボットの 4 種類の玩具を用意した。この後者 4 種の玩具は自由な遊びが可能ないようにとの配慮から用意した。

(c) モデリングセッション モデル行動を VTR に撮った同じ部屋で、実験者が受容群と拒否群の被験児ひとりひとりに隠し絵テストのカード (10 枚) を見せながら “これからこんなテストをしてもらいますが、まだ準備ができていないので、テレビを見て待っていてね。テレビには ○○ ちゃんのお母さんが出てくるよ。” と言い、母親のモデル行動を見せた。子どもがテレビ画面をよく見ているかどうかについて、観察者 2 名がついたの後ろから 5 秒間ごとにチェックしたところ、皆よく見ており、条件間に有意差はなかった。

ビデオが終わると “もう少し準備に時間がかかるので、向こうの方で自由に遊んでいてちょうだい。” と指示し、子どもをモデル場面と同じ状況で 5 分間自由に遊ばせた。それをタイマーを接続した VTR に録画した。自由遊びの子どもの行動について、ついたの後ろから 2 人のうちひとりの観察者がモニターテレビを見ながら観察記録を行い、見えない場合はついたの後ろから観

察した。

5 分間の自由遊びの後、“準備ができたから、こちらに来てちょうだい” と言って、隠し絵テストをあたかも中心課題であるかのように実施した。その後、P-F スタディの一部 (8 場面) を、ハ切り画用紙大にコピーしたものを個別に 1 枚ずつ呈示して、口頭で質問し、口頭で答えてもらった。

統制群は、モデル行動を観察させないということ以外は、すべて実験群 (受容群、拒否群) と同じであった。

(6) 自由遊び行動の分類 VTR に録画された子どもの自由遊び行動は、手書きによる観察記録を参考にしながら、2 人の評定者 (女子大学生) により 15 秒を 1 単位として独立に分類された。15 秒を 1 単位としたのは、VTR を一通り見た結果、行動の 1 つのまとまりが 15 秒程度で完了すると考えられたからであった。分類のカテゴリーは、攻撃行動、向社会的行動、その他行動、無為の 4 つに分け、さらに攻撃行動と向社会的行動はそれぞれ完全模倣、部分模倣、般化模倣のいずれかに分類した。完全模倣はモデルと全く同一の行動をすることであり、部分模倣はモデル行動の一部あるいは人形やブタ以外の対象へのモデル行動の全部または一部の模倣行動、般化模倣は怪獣どうし戦わせるとか人形を寝させるなどのモデル行動にない攻撃行動や向社会的行動をさせている。その他行動は積木を積む、ボールで遊ぶなどの攻撃行動や向社会的行動以外の遊び行動であり、無為は座っているだけのように特別な遊びをしない状態をさせている。あらかじめカテゴリーごとに具体例を明確にし、それに基づいて行動を分類した。また行動とことばの両方が出現した場合は出現度 2 とした。

(7) 子どもと親の攻撃性と愛他性の測定 子どもの日頃の攻撃性や愛他性の程度については、森下 (1985) の尺度を用い、母親および幼稚園の担任教師に評定を求めた。また P-F スタディ (住田・林・一谷, 1964) を用いて攻撃性がどこに向かうかを測定した。母親自身の攻撃性と愛他性については、山内・林・岩脇・橘・小川・金子 (1982) の項目を参考にしながら、新たに各 10 項目ずつ作成した。この 20 項目をランダムに配列した質問紙について、母親に対して 4 段階評定 (当てはまらない、やや当てはまる、たいてい当てはまる、ぴったり当てはまる) を求めた。そのデータを因子分析した結果、最終的に斜交 4 因子解が得られた。第 1 因子は攻撃性、第 2 因子は愛他性の因子と考えられた。各因子に 0.30 以上の高い負荷をもつ項目を示すと Table 2 のようになった。各項目への評定に対して 0—3 点と得点を与え、その合計点をもって攻撃性および愛他性の尺度得点とした。

(8) 質問紙による母親の養育態度の測定 小嶋 (1971) の作成した養育態度尺度のうち、子どもに対する

Table 2
Items of the scales for aggression and altruism in mothers

項 目		因子負荷
第1因子 (攻撃性)	1. もし誰かが私に不当なことをしてきたら、厳しく思い知らせてやりたい。	.580
	2. 自分の意見が入れられないときは、黙っていられない。	.549
	3. いらいらさせる人には、ついつい思ったことを言いたくなる。	.707
	4. 仲間の誰かがいじめられたら、みんなでかたきをとってやる。	.398
	5. 相手がしかけてきたら、喧嘩をする。	.587
第2因子 (愛他性)	6. よその子どもがよく遊びにくる。	.315
	7. 子どもと一緒によく遊んであげる方だ。	.463
	8. 子どもの話を親身になって聞いてあげる。	.669
	9. 他の人に対して思いやりがある方だ。	.524
	10. 他の人に対して親切な方だ。	.490
	11. 朝、夫や子どもを笑顔で送り出す。	.329

Table 3
Consistency of the ratings for children's behavior

Consistency measure	Aggressive behavior			Prosocial behavior			Others	Nonplay
	Whole	Partial	Transfer	Whole	Partial	Transfer		
Percentages of congruence	.99	.93	.96	.97	.88	.98	.87	.89
Correlation coefficients	.99	.98	.96	.91	.77	.91	.98	.99

Table 4
Degree of category clustering of children's behavior

Group		Imitation			Aggressive behavior			Others	Nonplay
		Whole	Partial	Transfer	Whole	Partial	Transfer		
Male	Acceptance	11	54	7	9	31	0	95	24
	Rejection	3	28	3	6	41	0	108	29
	Control	0	50	37	3	21	0	96	20
Female	Acceptance	18	17	2	5	51	0	64	55
	Rejection	3	48	0	3	35	4	65	59
	Control	0	24	0	2	52	0	101	38

暖かい態度 (愛情: Warm, affectionate feelings), 拒否的な態度 (拒否: Cold, unsympathetic hostile), 干渉や罰の厳しさ (統制: Control) を測定すると考えられる 3 尺度を用いた。

(9) データの処理 VTR に録画された子どもの 5 分間の自由遊び行動は、先の分類基準 (方法 (6) 参照) にしたがって分類された。そしてその度数を被験者ごとに集計し、男女別、条件別に平均値を求め、分散分析を行った。CCP および P-F スタディの反応は手引にした

がって分類した。質問紙については必要に応じて因子分析を行い、尺度を構成した。また目的にしたがって変数間の相関係数を算出した。

結 果

母親の態度と子どものモデリング行動

子どもの 5 分間の自由遊び行動について、2 人の評定者が基準にしたがって、それぞれ独立にカテゴリー分類を行った。評定者間の一致率や相関は Table 3 のよう

に高いものであった。そこで、実験者の方の評定を用いて以下の分析を行った。カテゴリーごとの行動出現頻度を男女別、条件別に求めた結果が Table 4 である。

まず男児について、攻撃行動と向社会的行動のそれぞれについて、模倣全体の平均値が Fig. 2 に示されている。分散分析の結果、攻撃行動と向社会的行動の間に有意差 ($F_{(1,27)}=6.76, p<.05$) があり、条件とモデリング行動(攻撃行動・向社会的行動)との交互作用も有意であった ($F_{(2,27)}=4.40, p<.05$)。そこで Tukey の法により詳細に分析すると、攻撃行動に関して、受容群-拒否群、統制群-拒否群の間にそれぞれ 5% 水準で有意差があり、拒否群の攻撃行動の少なさが顕著であった。向社会的行動については条件差がなかった。また各条件におけるモデリング行動を比較した結果、統制群においては攻撃行動が向社会的行動よりも有意に多かった ($F_{(1,27)}=11.96, p<.01$)。統制群における攻撃行動は、ボボ人形を殴るなどの転移模倣に当たるものが他の群に比べて多いのが特徴であった。それに対して、拒否群においては向社会的行動のほうが攻撃行動よりも多い点が注目される。

女兒の結果は Fig. 3 に示されている。分散分析の結果、攻撃行動および向社会的行動に関して、いずれの条

件にも有意差が認められなかった。また各条件におけるモデリング行動間にも有意差がなかった。

性差について、攻撃行動の平均値に関しては、条件と性の交互作用が有意であった ($F_{(2,54)}=3.40, p<.05$)。条件ごとに分析したところ、統制群において攻撃行動は男児のほうが女児よりも有意に多く ($p<.01$)、向社会的行動は女児のほうが男児よりも多い傾向がみられた ($p<.10$)。その他の条件には有意な性差はみられなかった。

受容、拒否、統制群において、園や家庭での攻撃性、園や家庭での愛他性、母親の養育態度(愛情、拒否、統制)の平均値に関して、3(条件)×2(性)の分散分析を行ったところ、いずれの場合も有意差は認められなかった。P-F スタディの結果について、分散分析を行ったところ、外罰得点において群間に差があり ($F_{(2,54)}=3.00, p<.10$)、Fig. 4 のように、拒否群が他の群よりも外罰得点が高かった。

モデリング行動と関連する変数

子どもの攻撃行動や向社会的行動のモデリングと他の変数との間にどのような関連があるかを検討するために、受容群と拒否群を合わせた男女各 20 名について、相関係数を求めた (Table 5)。

男児について有意な相関係数に注目すると、攻撃行動に関しては、P-F スタディの外罰得点の高い子どももほど攻撃行動の出現は少なかった。また有意ではないが 10% 水準で、園での子どもの攻撃性が高いほど向社会的行動の出現度が大だという傾向がみられた。さらに母親の攻撃性が高いほど子どもの向社会的行動が多いという傾向があった。その他の変数と男児のモデリング行動との間には、有意な相関は認められなかった。したがって、攻撃行動のモデリングには園や家庭での子どもの攻撃性は関連がなかった。またここでの攻撃行動や向社会的行動のモデリングには、母親自身の評定した養育態度(愛情、拒否、統制)は関連があるとはいえなかった。

女兒に関しては、攻撃行動と向社会的行動のいずれの

Fig. 2. Modeling behavior (male).

Fig. 3. Modeling behavior (female)

Fig. 4. Extrapunitive response.

Table 5
Correlation coefficients between modeling behaviors and otaer variables

Variables		Male				Female			
		1 Ag.B.	2 Pr.B.	3 Ag.K.	4 Al.K.	1 Ag.B.	2 Pr.B.	3 Ag.K.	4 Al.K.
CHILDREN	1 Aggressive behavior	1.000	.282	.102	.215	1.000	.036	.261	-.211
	2 Prosocial behavior	.282	1.000	.441+	-.015	.036	1.000	.100	.154
	3 Aggression at kindergarten	.102	.441+	1.000	-.416+	.261	.100	1.000	-.057
	4 Altruism at kindergarten	.215	-.015	-.416+	1.000	-.211	.154	-.057	1.000
	5 Aggression at home	.188	.249	.651**	.002	-.069	.112	.394+	.190
	6 Altruism at home	.349	.276	-.125	.319	.049	.023	-.057	-.014
	7 PF-Extrapunitive	-.445*	-.326	-.073	-.080	-.199	.249	-.346	-.277
	8 PF-Intropunitive	-.140	-.126	-.082	-.120	.053	-.204	.402*	-.031
	9 PF-Impunitive	.044	-.185	.167	.157	-.240	.237	.186	.504*
MOTHER	10 Aggression	.031	.408+	.417*	-.272	.195	.355	.400+	.487*
	11 Altruism	.205	.185	.104	-.077	.151	.364	-.292	.361
	12 Warm, affectionate feelings	.067	-.044	-.073	.096	.164	-.230	-.351	.352
	13 Cold, unsympathetic hostile	.110	-.064	.046	-.099	-.268	.289	.145	.488*
	14 Control	.179	-.255	-.057	.003	-.197	.351	-.082	.457*

+ $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$.

モデリングの場合も有意な相関のある変数はなかった。子どもの攻撃性と愛他性

Table 5 からわかるように、男児の園での攻撃性は、家庭での攻撃性や母親の攻撃性と有意な正の相関があった。また、男児の家庭での愛他性は、母親の受容的態度(0.536)や母親の愛他性(0.651)と有意な相関があった。

女兒の園での攻撃性も、男児と同じように、家庭での攻撃性および母親の攻撃性ととの間に 10% 水準で正の相関があった (Table 5)。また P-F スタディの内罰反応が多い子どもほど園での攻撃性が高かった。女兒の園での愛他性は、男児とは異なって、母親の拒否的態度や統制的態度、および母親の攻撃性と正の相関があった。また無罰得点が高い子どもほど園での愛他性が高かった。母親の愛他性は女兒の家庭での愛他性と正の相関 (.387) があり、攻撃性とは負の相関 (-.451) があった。

考 察

男児の攻撃行動のモデリングと母親の態度

モデルとして母親の協力が必要だという理由から、受容得点が平均値に近い子ども (4 点の者) を男児では拒否群のなかに含まざるをえなかった。これは手続き上の問題点であるが、その人数が少ないので、結果への影響は比較的少ないのではないかと考えられる。

男児は母親を拒否的だと認知している群(拒否群)のほうで、統制群や受容群よりも攻撃行動のモデリングが少

なかった。向社会的行動、その他行動、無為のカテゴリ一出現度にはそれぞれ群間に有意差がなかったので、男児の拒否群においては母親のモデル行動を観察することによって、攻撃行動のモデリングのみが抑制されたと考えられる。この結果は、担任教師を拒否的だと認知している男児のほうで攻撃行動のモデリングが多く生じたという森下 (1985) の結果とは対照的である。

なぜこのような差異が生じたのであろうか。先の研究と本研究とはほぼ同じ方法を用いているが、本研究では被験児が 1 歳年少の 4 歳児であったということと、モデルが幼児の母親であったという点が大きな違いである。また、本研究では実験室に呼ばれるまでは何も知らされないで、VTR に突然母親が現われたということ、今回はひとりでなく 2 人の実験者がついたてのうしろから観察していたということが、子どもの不安を高めたのではないと思われる。

本研究における男児拒否群は受容群よりも、P-F スタディの外罰得点が高いのに対して、攻撃行動のモデリングは少なかった。この結果は Sears (1951) の結果と類似している。すなわち彼によれば、罰の厳しい母親をもつ幼児のほうが、ドル・プレイにおいては強い攻撃性を示したのに対して、幼稚園の日常生活においては攻撃行動は少なかった。社会的場面におけるこのような行動の自己抑制機能は、3 歳から 7 歳にかけて上昇傾向を示すということが明らかにされている (柏木, 1987)。また

P-F スタディにおいて外罰反応を多く示す者の自我は、他者から非難され攻撃されはしまいかもしれないと恐れている自我であると Rosenzweig はいう (一谷・林, 1976; 住田・林・一谷, 1964). したがって, P-F スタディやドル・プレイなどに投影される攻撃性が高い場合, 不安の高い状況においてはこのような自我が攻撃行動の出現を抑制するというメカニズムがはたらくのではないかと考えられる. 事実, 罰の厳しさや力中心の態度と子どもの攻撃行動との間には, 条件によっては負の関連がみられている (Hoffman & Saltzstein, 1967; 高島, 1970). ただしこの点については今後の検討が必要である.

攻撃行動, 向社会的行動のモデリングと攻撃性, 愛他性

攻撃行動のモデリングと園や家庭での子どもの攻撃性との間, および向社会的行動のモデリングと子どもの愛他性との間には有意な相関がなかった. したがって, ここのモデリング行動は日頃の子どもの攻撃性や愛他性を反映していない. ここではむしろ予想に反して, 園での攻撃性の高い男児ほど向社会的行動のモデリングが多く, そのような男児ほど母親の攻撃性が高いという傾向がみられた. このように, 男児の向社会的行動のモデリングは自己防衛的な色彩の濃い行動ではないかと考えられる.

担任教師が評定した園での子どもの攻撃性は, 男女ともに, 母親の評定した家庭での攻撃性とかなり高い正の相関を示した. したがって, 攻撃性に関する評定の妥当性が一応検証されたといえる. また園での攻撃性が母親自身の攻撃性と男児では 5%, 女児では 10% 水準で正の相関があったことから, 男児あるいは女児も, 母親の攻撃性や攻撃行動を自己のモデルとしている可能性がある. この点は Hoffman (1960) や Sears et al. (1957) の研究結果に沿ったものといえる.

女児の園での愛他性は, 母親の拒否の態度や統制的態度, 母親の攻撃性といずれも正の相関が認められた. これは従来の多くの研究結果と一致しないものである. この点については, さらに多くのデータを集めて確認する必要がある. もしもこれが事実だとすれば, 母親の態度の冷たさ・罰の厳しさ・攻撃性のなかのなにがどのようにして園での女児の愛他性に影響を与えるのかを明らかにしなければならない. ここには罰や拒否に対する防衛がはたらいっているかも知れない. これは, 母親の拒否の態度が男児の攻撃行動のモデリングの抑制を高めたのではないかという先ほどの説明と, 同じ視点となる. しかし, この場合どのような条件において防衛機制が生じるかを明確にしなければ, 説明が恣意的になる. これらは今後検討すべき課題である.

引用文献

- 後浜燕子 1978 モデルへの依存度と養育関係の認知が幼児の模倣行動におよぼす影響 心理学研究, 49, 241-248.
- Bandura, A. 1977 *Social learning theory*. New Jersey: Prentice-Hall.
- Dlugokinski, E. L., & Firestone, I. J. 1974 Other centeredness and susceptibility to charitable appeals; Effects of perceived discipline. *Developmental Psychology*, 10, 21-28.
- 藤井京子 1973 Modeling に及ぼす認知的効果について 日本教育心理学会第 15 回総会発表論文集, 426.
- 林 勝造・一谷 彊・小嶋秀夫 1973 親に対する子どもの認知像の検査法——CCP 解説 1973 年版——大成出版牧野書房
- Hoffman, M. L. 1960 Power assertion by the parent and the impact on the child. *Child Development*, 31, 129-143.
- Hoffman, M. L. 1963 Parent discipline and the child's consideration for others. *Child development*, 34, 573-588.
- Hoffman, M. L. 1970 Moral development. In P. H. Mussen (Ed.), *Carmichael's manual of child psychology* (Vol. 2). New York: Wiley. Pp. 261-359.
- Hoffmann, M. L. 1975 Altruistic behavior and the parent-child relationship. *Journal of Personality and Social Psychology*, 31, 937-943.
- Hoffman, M. L., & Saltzstein, H. D. 1967 Parent discipline and the child's moral development. *Journal of Personality and Social Psychology*, 5, 45-57.
- 一谷 彊・林 勝造 1976 投影法の基礎的研究——Rosenzweig P-F Study を中心として—— 風間書房
- 柏木恵子 1987 自己制御 (self-regulation) の発達 心理学評論, 29, 3-24.
- 小嶋秀夫 1971 幼児の知的機能とインヴェントリーで測った母親の態度・行動 金沢大学教育学部紀要 (教育科学編), 20, 29-44.
- Londerville, S., & Main, M. 1981 Security of attachment, compliance, and maternal training methods in the second year of life. *Developmental Psychology*, 17, 289-299.
- 松田 惺 1973 幼児の母親模倣行動における母子関係の影響 心理学研究, 44, 79-84.
- 森下正康 1982 中学生における親の養育態度と対人特性の同一視 教育心理学研究, 30, 142-146.
- 森下正康 1983 児童期の親子関係と対人行動特性の同一視 和歌山大学教育学部教育研究所報, 6, 27-39.
- 森下正康 1985 幼児の攻撃行動・愛他行動のモデリング——教師モデルに関する受容的-拒否的態度の認知の影響—— 心理学研究, 56, 138-145.
- Rutherford, E., & Mussen, P. H. 1968 Generosity in nursery school boys. *Child Development*, 39, 755-765.

- Sears, R. R. 1951 Doll play aggression in normal young children: influence of sex, age, sibling status, father's absence. *Psychological Monographs*, 65, No. 6
- Sears, R. R., Maccoby, E. E., & Levin, H. 1957 *Patterns of child rearing*. Evanston, Ill.: Row & Peterson.
- 住田勝美・林 勝造・一谷 彊 1964 ローゼンツアイク人格理論 三京房
- 末田啓二・庄司留美子・森下正康 1985 母子相互の対応様式の分析——質問紙法による母子の対応連鎖の特徴——和歌山信愛女子短期大学信愛紀要, 25, 31-38.
- 高島恭子 1970 攻撃行動獲得機序に関する研究 教育心理学研究, 18, 139-148.
- 山内弘継・林 保・岩脇三良・橘 良治・小川隆章・金子勲栄 1982 攻撃行動と養育態度(2)(3) 日本教育心理学会第24回総会発表論文集, 436-439.
- Yarrow, M. R., & Scott, P. M. 1972 Imitation of nurturant and non-nurturant models. *Journal of Personality and Social Psychology*, 23, 259-270.
- Zahn-Waxler, C., Radke-Yarrow, M., & King, R. A. 1979 Child rearing and children's prosocial imitations toward victims of distress. *Child Development*, 50, 319-330.
- 1989. 1. 10. 受稿, 1989. 11. 18. 受理——